九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

坂口安吾「白痴」と芥川龍之介「羅生門」

長野，秀樹
長崎純心大学教授

https://doi.org/10.15017/17830

出版情報：九大日文. 14, pp.80-88, 2009-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

坂口安吾「白痴」と芥川龍之介「羅生門」

長野秀樹 NAGANO Hideki

一　はじめに

本稿は坂口安吾「白痴」（「新潮」昭21・6）と芥川龍之介「羅生門」（「帝国文学」大4・11）を比較検討することで、最終的に「白痴」の結末の意味を考えることを目標とする。

安吾と芥川の関係については、安吾の「暗い青春」（「潮流」昭22・6）に芥川の「甥」に当たる葛巻義敏の縁で「あるじの自殺後二三年すぎ」た「芥川龍之介の家」に通ったことが語られている。アテネ・フランセの仲間たちと「言葉」「青い馬」などの同人誌を発行し、その編集作業のためだが、「あるじの苦悶がまだしみついてゐるやうに暗」い家の「その暗さを呪ひ、死を蔑み、そして、あるじを憎んでゐた」と安吾は述べる。葛巻の暮らす二階の八畳には「芥川全集の表紙に用ひた青い布」の残りが「ジュウタン」として敷かれていたという。

また、「文学のふるさと」（「現代文学」昭16・7）では、晩年の芥川と、ある「農民作家」とのエピソードを紹介し、「農民作家」の子殺しの話しに「突き放された」という芥川を評して「彼の生活に根が下りてゐないにしても、根の下りた生活に突き放されたといふ事実自体は立派に根の下りた生活であ」ると述べている。ともに、ここに記すまでもない有名なエピソードであるが、もちろん直接的に「白痴」と「羅生門」の影響関係を示すものではない。その他にも両者に直接的な影響関係があると断じることの出来る資料は管見に入ってはいない。しかし、その構造上の類似点を順次、指摘していく過程から「白痴」読解の手がかりを示したいと思う。

では、具体的に「白痴」と「羅生門」のどこに、共通点と差異を見出すことができるのか。もっとも大雑把な言い方では、両作品に共通するのは、男と女が出会う物語であるということであるが、それではあまりに大雑把過ぎるので、まずは、それぞれの物語の舞台から確認していきたい。

二　舞台

伊沢と「白痴」の女が出会うのは、昭和二〇年の空襲下の東京。下人と老婆が出会うのは、平安末期の京都、羅生門の楼上。時間と空間を異にする舞台のようではあるが、意外に二つの舞台はその本質において共通している。

言うまでもなく、「羅生門」の舞台となる京都は「地震とか辻風とか火事とか飢饉とか云ふ災がつゞいて起」き、「仏像や仏具を打砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に売つてゐた」時代である。

たとえば三好行雄氏はこの引用につづく羅生門の描写も含めながら、この世界を次のように述べている[1]。

芥川龍之介の描く〈羅生門〉は死の世界、いや死につつある世界の象徴である。死体が放置されているのは、死者を受け入れるべき世界がすでに朽え、崩壊しつつあることを示している。外には、死者を捨て、下人を放逐する世界がまだ存在していても、羅生門の時空は確実に病んでいる。倫理、道徳の根本にあるであろう信仰の象徴をも、生活のために打ち壊し売らざるを得ない世界として、「羅生門」の舞台は設定される。

これに対して、「白痴」の舞台は、次のような設定から始まっている。一応、確認のために引用しておく。

その家には人間と豚と犬と雞と家鴨が住んでゐたが、まつたく、住む建物も各々の食物も殆ど変つてゐやしない。物置のやうなひん曲がつた建物があつて、階下には主人夫婦、天井裏に母と娘が間借りしてゐて、この娘は相手の分らぬ子供を孕んでゐる。

伊沢の借りてゐる一室は主屋から分離した小屋で、こゝは昔この家の肺病の息子がねてゐたさうだが、肺病の豚にも贅沢すぎる小屋ではない。

「人間と豚と犬と雞と家鴨」が同列に暮らし、「相手の分らぬ子供を孕」む娘が暮らす空間。さらに続けてこの路地に暮らす人物たちが、列挙されていく。まずは、なぜ、娘の相手が特定できないかが説明され、続いて「七人目とか八人目とかの情夫を追ひ出し」その代わりの男を捜している「五十五といふ婆さん」。「その筋向いの米の配給所の裏手」に住む「小金を握つた未亡人」の兄妹の二人の子供は「夫婦の関係を結」び、二人の関係を解消するために、妹は「親戚に当る五十とか六十とかの老人」との結婚を無理強いされ自殺する。一帯には「安アパートが林立し、それらの部屋の何分の一かは妾と淫売が住」んでいるが、「その私生活の乱脈さ背徳性などは問題にな」ることもなく、あるいは「何課の誰さんの愛人」や「課長殿の戦時夫人」や「重役の二号」、「妊娠中の挺身隊」、はては「人殺しが商売だつたといふ支那浪人」も暮らしている。

この設定を三好行雄氏に倣って「白痴」「の時空は確実に病んでいる」と概括してもよいのかもしれないが、もちろん「病んでいる」という時、それは既存の倫理、道徳に基づけばという補注を必要とする。つまり、「羅生門」の空間は平安中期までの、曲がりなりにも仏教が尊ばれ、死者が尊厳を持って扱われた秩序が崩壊し、それまでの倫理、道徳が失われた空間として設定されており、「白痴」の空間もまた、明治、大正までの日本の既存の倫理、道徳が失われた空間として設定されている。林淑美氏は「重要なことなのだが」とことわった上で「この町内にあっては、日常茶飯の不道徳が不道徳と名指しされて指弾されることがない」[2]と述べているが、倫理や道徳が崩壊した空間に現れる男と女の出会いが、両者の物語の発端となるのである。

しかし、二つの作品の間には、そうした類似性だけではなく、

大正に生きた芥川と、昭和に生きた安吾という時代の差もまた、顕著である。

と云ふ意味は、今僕が或テエマを捉へてそれを小説に書くとする。さうしてそのテエマを芸術的に最も力強く表現する為には、或異常な事件が必要になるとする。その場合、その異常な事件なるものは、異常なだけそれだけ、今日この日本に起つた事としては書きこなし悪い、もし強て書けば、多くの場合不自然の感を読者に起させて、その結果折角のテエマまでも犬死をさせる事になつてしまふ。(3)

芥川が歴史に題材を取ることの自解として、しばしば引用される文章である。もちろん、こう語る芥川は未だ関東大震災を経験していないのだが、これに対し、安吾は同時代の日本を「或異常な事件」の舞台として設定し得たのである。それは近代において初めて、一般市民が大量殺戮戦としての戦争に巻き込まれるという体験であり、日常の延長に突如として万単位の死者が出来するという「事件」である。

人間が焼鳥と同じやうにあつちにこつちに死んでゐる。ひとかたまりに死んでゐる。まつたく焼鳥と同じことだ。怖くもなければ、汚くもない。犬と並んで同じやうに焼かれてゐる屍体もあるが、それは全く犬死で、然しそこにはその犬死の悲痛さも感慨すらも有りはしない。人間が犬の如くに死んでゐるのではなく、犬と、そして、それと同じやうな何物かがちやうど一皿の焼鳥のやうに盛られ並べられてゐるだけだつた。犬でもなく、もとより人間ですらもない。

つまり、安吾は日常から延長された空間に、こうした「或異常な事件」を設定し得たのであり、それに対し、芥川は日常から断絶された空間を設定することによって、初めて、「或異常な事件」にリアリティを与え得たのである。それを大正に生きた芥川の幸福と昭和に生きた安吾の不幸というべきなのかは、分からないが、その差が時代に関わるという側面があるのは確かであろう。

こうした差異を含みながらも、「羅生門」の空間も「白痴」の空間も、共に既存のモラルが崩壊し、社会秩序が揺れ動く中で、登場人物たちがぎりぎりの生死の境界上で、認識のドラマを演じざるを得ない状況に追い込まれて行くという構図は共通するのである。

三　伊沢と下人

次ぎに登場人物について、検討していきたい。まず、伊沢と下人である。老婆に出逢う以前の下人は、「主人から」「四五日前に暇を出され」、「行き所がなくて、途方にくれてゐ」て、しかも、餓死しないためには、「盗人になるより外に仕方がない」と知りながら、「積極的に肯定する丈の、勇気」を出すことができない男である。

こうした下人について、たとえば海老井英次氏は「彼は今、世界に対する〈人間そのもの〉であり、生活や人間関係という

意味の具体性を失っている。」[4]と評し、三好行雄氏は「かれは羅生門の片隅に、なすすべを知らぬ人間として――なにものかによって行為を封じられた人間として――いまなお、茫然と立ちすくんでいる。」[5]と評している。

これに対し、伊沢は「大学を卒業すると新聞記者になり、つづいて文化映画の演出家」になった二十七歳の男で「年齢にくらべれば裏側の人生にいくらか知識」があるが、その職業については次のように述べられる。

新聞記者だの文化映画の演出家などは賤業中の賤業であつた。彼等の心得てゐるのは時代の流行といふことだけで、動く時間に乗遅れまいとすることだけが生活であり、自我の追求、個性や独創といふものはこの世界には存在しない。（中略）要するに如何なる時代にもこの連中には内容がなく空虚な自我があるだけだ。

こうした認識は伊沢自身の自己認識でもあり、それでもまだ、伊沢自身はかろうじて芸術家としての良心を持ち、社長にも談判するが、完全に無視されてしまう。現実は何も変わらず、「蒼ざめた紙の如く退屈無限の映画がつくられ、明日の東京は廃墟にならうとしてゐる」。こうした状況の中で「伊沢の情熱は死」に、朝、目が覚めても「今日も会社へ行くのかと思ふと睡くなり、うとうとすると警戒警報がなりひゞき、起き上がりゲートルをまき煙草を一本ぬきだして火をつける」だけであり、会社では「除け者」とされている。

こうしてみれば伊沢と下人との間にそれ程の距離がないことは明らかである。主人から暇を出された下人と、クビになったわけではないが、職場に居場所が無く、為す術もなく、二百円の給料と煙草のために日を暮らす伊沢の姿はよく似ている。下人が饑えに直面し、このまま、盗人になるという選択をせねば饑死しなければならないとするならば、伊沢もまた、廃墟になりかねない東京に住み、このままでは空襲によって死ななければならないということを知りながら、無為に暮らしていることも、共通すると言うことができよう。もちろん伊沢の造型には、日本映画社の嘱託をしていた安吾自身の戦時中の体験などが反映されていることは確かであろうが、極限状況の中で自己を確立できないままに、その日暮らしを強いられている存在として見る限りに置いては、意外と両者の距離は近いのである。

四　「白痴」の女と老婆

たとえば三好行雄氏は大岡昇平の「野火」と比較しながら、老婆を「神なき風土のイエス」[6]と呼び、海老井英次氏はその役割を「〈裸の自我〉である下人に、いわば人間としての具体的態様を教示する」[7]ことだとする。

これに対し「白痴」の女は「伊沢の観念を盛る空虚な器」[8]として、伊沢の視点によって、その姿を次々に変えていく存在であるが、最初の本格的な接触において、「白痴」の女は所謂「聖なる愚者」としての顔を見せる。伊沢の留守中にアパートに逃げ込んでいた女は、夜になって、そのまま伊沢が蒲団に寝

ませようとすると、押入に逃げ込み、「私はこなければよかつた、私はきらはれてゐる、わたしはさうは思つてゐなかつた」と呟く。「電燈を消して一二分たち男の手が女の体に触れないために嫌はれた自覚をいだいてその羞しさに蒲団をぬけだ」し、押入に逃げ込んだのである。もちろんその判断は伊沢の判断であり、はっきりと言葉を発しない女の断片的な言葉を、つなぎ合わせて伊沢が判断しているのだが、その行為に伊沢は「白痴の心の素直さ」を読み取り、「俺にもこの白痴のやうな心、幼い、そして素直な心が何より必要だつたのだ」と思う。

ところが、そうした「白痴」の女像は伊沢自身によって、直ちに変更される。伊沢が「忘れ得ぬ二つの白痴の顔」。一つは初めて関係を持った時の「白痴」の女の顔で、それ以来、「白痴の女はたゞ待ちもうけてゐる肉体」に過ぎず、「在るものはたゞ無自覚な肉慾のみ」であり、「虫の如き倦まざる反応の蠢動を起す肉体」である。そして、もう一つの顔は、空襲におびえ、「影ほどの理知も抑制も抵抗もな」くし、「あさましい」までに「たゞ死の窓へひらかれた恐怖と苦悶が凝りつ」いた「醜悪」な顔である。

このように「白痴の女をめぐって、伊沢の考えは二転三転する」[9]のだが、四月十五日の空襲の夜、次の伊沢の言葉に、「女はごくんと頷」く。

死ぬ時は、かうして、二人一緒だよ。怖れるな。そして、俺から離れるな。火も爆弾も忘れて、おい、俺達二人の一生の道はな、いつもこの道なのだよ。この道をたゞまつすぐ見つめて、俺の肩にすがりついてくるがいゝ。分つたね。

女の「頷きは稚拙であつたが、伊沢は感動のために狂ひさうにな」り、「今こそ人間を抱きしめてをり、その抱きしめてゐる人間に、無限の誇りをもつ」のである。さらに、夜が明けて、女に対する伊沢の認識は一変するが、この時点でも、伊沢の女に対する認識は肯定、否定、肯定へと変化していることが分かる。

そして、こうした主人公の認識の変化は、そもそも「羅生門」の下人を論ずる時の基本ではなかったか。「下人の心理の推移を主題とし、あわせて生きんが為に、各人各様に持たざるを得ぬエゴイズムをあばいているもの」[10]とは、吉田精一氏の古典的とも言える「羅生門」解釈であるが、老婆との関係で、次々に変化していく、下人の心理状態はここで確認するまでもないだろう。

さらに付け加えれば、老婆も「白痴」の女も動物に比喩によって語られるという特徴も共通である。列挙すれば老婆は「猿のやうな」、「鶏の脚のやうな」「肉食鳥のやうな」「鴉の啼くやうな」「蟇のつぶやくやうな」などの比喩で形容される。「白痴」の女も同様に「虫の抵抗の動きのやうな」「芋虫の孤独」「豚の鳴声に似てゐた」「豚そのものだ」「俺の隣に並んだ豚」などの比喩で語られる。

「羅生門」における、こうした動物の比喩の多用について東郷克己氏は、特に「猿」を比喩として語られる「老人」の姿に、芥川が「人間の「醜い」獣性」を見出したからにほかならない

と言う。「芥川にとって「猿」こそ人間のかたちをした獣であり、まさに「人間獣」の比喩にふさわしいものであったのだろう」[11]と言うのである。これに比べて、安吾が「白痴」の女を比喩する基本は「豚」である。いうならば「豚」は「肉慾の権化としての〈女〉の属性」[12]を象徴していると言ってよいだろう。しかも、その比喩は女のいびきを「豚の鳴き声に似てゐた」というレベルから、存在を「豚そのものだ」と断定するレベルへ、さらには「俺の隣に並んだ豚」と女と豚が等価交換されるレベルへと進んでいく。

五　結末

「白痴」の結末、かろうじて米軍の無差別爆撃から逃れ、九死に一生を得た二人が、一夜を明かした後、伊沢が「夜が白みかけてきたら、女を起して、焼跡の方には見向きもせずに、ともかくねぐらを探して、なるべく遠い停車場をめざして歩きだすことにしよう」と考える場面は、「じつはいささかわかりにくい」[13]場面である。花田俊典氏はたとえば、なぜ「焼け跡の方には見向きもせずに」歩き出そうとするのかというと「おそらくは白痴の女を、「人間」として錯覚してしまった場――陥穽の空間」[14]だからであるとし、なぜ「なるべく遠い停車場」をめざさねばならないかというと、「停車場」とは「一つの帰着点であると同時に出発点でもある地点の象徴」[15]であると見て、「堕落論」を引きながら、人間が「正しく堕ちる道を堕ちき」るためには、その「折り返し点」としての、「停車場」は、「「なるべく遠い」ほうが望ましい」[16]からだと述べる。深く「堕ちる」ことで、より深く立ち直ることができるのであれば、その「堕ちる」距離はできるだけ長い方が良いという解釈である。

だが、疑問はもうひとつ残る。なぜ、伊沢は「白痴」の女を連れて行こうとするのか、という疑問である。花田氏はそれに対しても、解答を用意しているが、その検討は後ほど行うことにして、改めて、確認すれば、伊沢は米軍の無差別爆撃が終わった後の「白痴」の女を次のように認識している。

女のねむりこけてゐるうちに、女を置いて立さりたいとも思つたが、それすらも面倒くさくなつてゐた。人が物を捨てるにはたとへば紙屑を捨てるにも、捨てるだけの張合ひと潔癖ぐらいはあるだらう。この女を捨てる張合も潔癖も失はれてゐるだけだ。微塵の愛情もなかつたし、未練もなかつたが、捨てるだけの張合ひもなかつた。

伊沢が女を捨てずに、一緒に立ち去るその理由を、語り手が伊沢の内面から説明する件である。しかし、考えれば奇妙ではある。捨てることさえも「面倒くさ」いと言うのなら、女は眠りこけているのだから、黙って立ち去るだけでことは済むはずである。眠り込む「女を起して」歩き出すことの方が、はるかに「面倒くさ」いことは確かである。にもかかわらず、伊沢は「女を起」こすことを、選ぼうとしている。その場に女を残して立ち去ることを選ぶのではなく、女と共に立ち去ることを選ぼうとしているのである。

この伊沢の選択は、「足にしがみつかうとする老婆を、手荒く屍骸の上へ蹴倒し」「黒洞々たる夜」の中へ、一人で消えていった下人の行為とは表面上、正反対の行為である。

なぜ、下人が老婆を蹴倒さねばならないのかについては、幾つかの見解があろう。そのすべてを辿ることはできないが、吉田精一氏は「生きんが為に、各人各様に持たざるを得ぬエゴイズム」[17]の発露をそこに見出しているだろうし、三好行雄氏は、「悪が悪の名において悪を許す」[18]というのだから、下人の行為もまた、老婆によって許されていると言う。海老井英次氏は下人が老婆から奪い取ったものはただ「単に一枚の着物ではなく、老婆が身につけていた人間としての生き方（哲学）であり、下人はそれによって〈裸の自我〉から人間としての具体的な存在となった」[19]のだという。にも関わらず、「導師である老婆をその後下人が蹴倒」すのは、「それは老婆が、自己弁明によって、せっかく確然としていた生そのものを感傷の中に溶かし込もうとしたからなのであろう」[20]とする。

このような見解は所謂「老婆の論理」を重視し、その論理を下人が獲得したことを前提としているわけだが、本文中には下人が「冷然として、この話を聞いてゐた」という表現があることも指摘され、「老婆の論理に納得しているわけではない」[21]とする木村一信氏などの論もある。「老婆の論理の負性を悟」[22]ったがゆえの行動だと考えれば、老婆を蹴倒すことの意味はより明快ではあるだろう。とまれ、下人は老婆を蹴倒すことで、老婆と決別していくのである。

そうした下人の行動と伊沢の行為を比較する時に、あらためて浮かび上がるのは、伊沢は「白痴」の女と歩き出すことを選択しているという事実である。伊沢が女と歩き出すことの意味は、先ほど見たように、語り手によれば、「面倒くさ」いからであり、「捨てるだけの張合ひ」もないからということになる。しかし、この説明だけでは納得できないことはすでに指摘した。ここで、あらためて、注目しなければならないのは、伊沢の「白痴」の女に対する認識の変化であろう。先に確認したように、伊沢は無差別爆撃の中で、自分の言葉に反応して「ごくんと頷いた」女に対し「今こそ人間を抱きしめてをり、その抱きしめてゐる人間に、無限の誇りをも」った。自分と意志を交わし合うことができたこの瞬間に、伊沢は「白痴」の女を「人間」として認めたのである。言葉を持つインテリとしての伊沢の人間認識が示される場面である。

その後、空襲が終わり、二人だけが雑木林に残され、「すべての人々が今焼跡の煙の中を歩いてゐ」る時に、眠りこけるのみの女は目をさましても「眠りこけた肉塊に何物を附加へることも有り得ない」という。そうであるならば、そうした伊沢の人間認識の中で、女は「人間」の座を滑り落ち、「豚そのもの」から「豚」へと変化していかざるを得ない。

にも関わらず、伊沢は女を捨てないのである。たとえば、先にも引用した花田俊典氏は、伊沢が「白痴の女を拒否しない」のは、「伊沢が自分のなかに白痴の女の存在を自覚したからであり、その存在を無視し拒否することが、ひいては「人間」た

る自己を喪失してしまう結果につながることを知らされたからにほかならない」[23]とする。

自己の内部にも「白痴の女」が存在することを自覚することによって、伊沢は女と共に歩き出すことを決心する。その姿は、老婆を蹴倒すことで、人間としての様態を獲得していく下人の姿と対照的であり、それは、とりもなおさず、伊沢の人間認識の広がりを意味しているのではないか。空襲の夜に女を抱きしめながら、「今こそ人間」だと女を認識した伊沢の認識は、言葉を持つインテリゲンチャの人間認識として、狭く厳しい。

ところが、ここでの伊沢の人間認識を比喩として語れば「豚」だって「人間」だという認識の広がりが在るのではないだろうか。もちろん「豚」は「人間」では有り得ない。しかし、伊沢の認識の中で比喩として語られる「豚」は、かつて「人間」だったはずである。「豚」を「豚」のままに、「人間」として認識する。それは不可能なことではないだろうし、伊沢が「白痴」の女と歩きだす意味は、それ以外には考えられないのである。一方で、この解釈はあまりに、伊沢が「白痴」の女と同道することに、ポイントを置きすぎた解釈かも知れないという批判はあろう。だが、本稿の視点として、「羅生門」を補助線として引く時に、伊沢が「白痴」の女と一緒に歩きだすことの意味は、強調されて良い。

物語の結びは「今朝は果たして空が晴れて、俺と俺の隣に並んだ豚の背中に太陽の光がそゝぐだらうか。と伊沢は考へてゐた。あまり今朝が寒すぎるからであつた。」と結ばれている。その表現は厳しく、決して希望にあふれたものではない。たとえ、伊沢が新しい人間認識を獲得していたとしても、その実践は未だ行われず、「なるべく遠い停車場をめざして歩きだす」だけである。

伊沢と「白痴」の女の行方は、誰も知らない。

六　終わりに

「白痴」と他の作品との影響関係については、安吾作品との関連では「堕落論」（「新潮」昭21・4）の小説化として、その関連が早くから指摘され、また、「日本文化私観」（「現代文学」昭17・2）や小説では「外套と青空」（「中央公論」昭21・7）との関係が指摘されている[24]。他の作家としては、ちょうど日本へ輸入されたばかりのサルトルの実存主義との類縁性が指摘されている。

最初に触れたように、本論で補助線として利用した「羅生門」からの直接的な影響関係を証拠立てる資料は見つからないが、作品内部の関連として指摘した以外に、老婆の話を聞き終わった「下人の心には、或勇気が生まれて」くるが、逃げ込んできた「白痴」の女を一晩泊めようとする「伊沢の心に」も「奇妙な勇気が湧いて」くるところなども関連づけられるかも知れない。また、「羅生門」の後日譚とも言える「偸盗」で「天性白痴に近い」とされる阿漕の存在も考慮に入れることもできよう。

さらに、『白痴』の「後記」（『白痴』昭22・5　中央公論社）のな

かで「白痴」と「外套と青空」を評して「作者が見るのも厭だといふ作品は、作者が自身の汚さ厭さをそこに見せつけられるからで、作品の出来がヘタだといふ意味ではない。それは作者一人の秘密で、読者には共通しない性質のものであるかも知れず、文学の意味の一つは作者が自ら嘔吐すら覚えるやうな作品の秘密にむしろあるのかも知れない」と述べているのも、想像を逞しくすることが許されれば、「白痴」と「羅生門」の間の「秘密」を暗示しているのかも知れない。

【注記】

1 『芥川龍之介論』（昭51・9　筑摩書房）
2 「〈モラル〉という新しい概念の創造」（「坂口安吾論集」Ⅰ、平14・9）
3 「昔」（「東京日日新聞」大7・1・1）
4 『芥川龍之介論攷―自己覚醒から解体へ―』（昭63・2　桜楓社）
5 注1に同じ。
6 注1に同じ。
7 『鑑賞日本現代文学11　芥川龍之介』（昭56・7　角川書店）
8 菊地薫「オサヨ（白痴の女）」（「坂口安吾事典　事項編」平13・12　至文堂）
9 花田俊典『坂口安吾生成』（平17・6　白地社）
10 『芥川龍之介』（昭17・12　三省堂）但し引用は『吉田精一著作集1　芥川龍之介Ⅰ』（昭54・11　桜楓社）に拠った。
11 「「猿のやうな」人間の行方―「羅生門」「偸盗」から「地獄変」へ」（『一冊の講座　芥川龍之介』昭57・5　有精堂）但し引用は浅野洋編『芥川龍之介作品論集成1　羅生門』（平12・3　翰林書房）に拠った。
12 注9に同じ。
13 注9に同じ。
14 注9に同じ。
15 注9に同じ。
16 注9に同じ。
17 注10に同じ。
18 注1に同じ。
19 注4に同じ。
20 注4に同じ。
21 「「羅生門」論―己れの座標を求めて」（『アプローチ芥川龍之介』平4・5　明治書院）
22 注21に同じ。
23 注9に同じ。
24 花田俊典氏は『坂口安吾生成』中の「「白痴」の位置　戦後安吾文学の出発」（「文芸と思想」45　昭56・1）において、発表順は逆であるが、執筆は「外套と青空」の方が早いことから、「外套と青空」のキミ子が、「白痴」の「女として甦った見なすことはできないだろうか」と論じている。

（長崎純心大学教授）